

陳舜臣さんを語る会通信

NO.86 Oct. 2022

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橋雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日 2022年10月20日
http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/

推理中短編集『クリコフの思い出』、『海の微笑』

徳間文庫版『凍った波紋』『解説』で各務三郎氏は、「作者が『北京悠々館』（一九七一）あたりから急速に推理小説から遠ざかったのは、さびしい」と述べておられます（本通信No. 80）。本号に取り上げたのは、そのような現象の中での推理中短編集2冊、『クリコフの思い出』（1986 新潮社）と『海の微笑』（1991 徳間書店）です。

ところで、この2冊は少し性格が異なります。前者に収録の8編の初出は1980～1985年と比較的同時期ですが、後者に収録の4編の初出は、1966年2編、1970年1編、1981年1編とまちまちです。また、後者については、陳舜臣さんの「あとがき」も、そのあたりの事情理解の参考になります。（編集委員 橋雄三）

題 初出	『クリコフの思い出』各編紹介(1)
クリコフの思い出 『小説新潮』 昭和55年3月号	「私」：ほぼ陳さん。中垣宏：祖父、および父は著名な薬物学者。宏は小説家志望であったが、兄の戦死で父の学統を継ぐことに。「私」の家と中垣家は三代にわたるつき合い。香港の一流ホテルの空室で、スラブ系の西洋人が殺された。被害者はバンコクのソ連大使館員で、腕ききのKGB諜報官であったことが判明する。しかも使用された毒物は漢方系の極めて特殊なもの。「私」と中垣は、共通の知人で、しばらく消息を絶っている薬学者クリコフの仕業だと睨むが… 新潮社版表紙 →
枯葉のダキメ 『小説新潮』 同57年3月号	作中時間はポートアイランドが完成した1981年から、15年前、起工の年に遡る。舞台は神戸 ●「私」：陳さんの分身、57歳。イラージ：インドの少数民族でゾロアスター教を信仰するパルシー族、57歳。居兆南：仕事は死体処理業。華僑の葬法は土葬→掘り起こし「洗骨」→再び埋葬（この時、故国に送って祖先の墓に葬り直すこともあった）であるが、この「洗骨」を仕事とした。ナリーマン：宝石商。イラージの伯父。居兆南の同居人。居村正雄：居兆南の息子。「私」より20歳ほど年長。これら登場人物が、どのようなストーリーを織りなすのか… ■ [ダキメ] ゾロアスター教の葬法は「鳥葬」であるが、鳥葬に必須なのが、死体をその中に曝す、ダキメと呼ばれる屋根のない塔 [中華義荘] 華僑の墓地 [二本松茶屋]



「枯葉のダキメ」補足 華僑の葬法及び中華義荘
傍線は編集委員の加筆

見出しのことについて、中華会館編『落地生根』（二〇〇〇年 研文出版）より抜粋・転載します。

中国国内では異郷の地で死去しても、霊棺は故郷に持ち帰って埋葬する回葬（帰葬）の習わしがあった。華僑もこの伝統にのっとり、中華義荘（最初の呼称は中華義園）では霊棺を仮埋葬するが屋内に安置した。また、一八八八年に閩帝廟ができるまでは葬儀も義荘内の礼堂で行っていた。仮埋葬するのは広東人や福建人に多く、故郷のしきたりと同じように仮埋葬後数年すると一度掘り出して骨を洗い、容器に入れ直した。中国の各都市にあった会館、公所では、自費で原籍地に回葬できない霊棺を、清明節の前に回葬するのが常であったが、神戸でも出身地別に組織された各幫が、

七年から十二年に一度、回葬を行っていた。しかし、華僑の定住化にともない、中華義荘に本埋葬するものが多くなっていくなか、一九三六年、二月を最後に回葬は行われなくなった。中華義荘は、一九四一年、中山手通七丁目から、現在地、長田区滝谷町に移転された。

下の画像は現在の中華義荘。前掲著より



『クリコフの思い出』各編紹介(2)

題 初出	『クリコフの思い出』各編紹介(2)	
四人目の香妃 『小説新潮』 同58年10月号	ペルシャの女性は香水を愛用する。香妃と呼ばれるのは、香水を愛用する美貌の女性だったのだろう。香水にたよらずとも、「生まれながら体に異香有り」という女性もいたとか。史書、史家は、カシュガルの首長の家系、ホージャ家ゆかりの「香妃」は三人いたとする。この作品には、カシュガルのバザールの楽器づくりの娘が四人目の「香妃」として登場する	
キッシング・カズン 『小説新潮』 同59年4月号	「私」は最後にほんの少し登場するだけ。孔敬昌：広東省梅県出身の客家。12、3歳で来日し50年になる。「支那そば屋」の下働きから始め、家主・野津正治の親切と時運で大阪の繁華街、3つのビルのオーナーに。山本松子：野津の口ききで孔の店の手伝いをするようになり、やがて孔と一緒にいる。孔一郎：松子に子ができず、男に瞞されて妊娠したお手伝いさんの子を孔の子として入籍したのが一郎。ビルの管理をする傍ら、絵が好きで、画材の店と画廊を経営。その画廊で、竹沢敏子と出会う。一郎と敏子の交際が始まるが、敏子は頼へのくちづけ以上は拒否した。一方、育ての母・松子を亡くし、父・孔敬昌が死に、孤児となった一郎は実母への思いをつのらせる	
透明な席 『小説新潮』 同60年2月号	「私」はシンガポールで美しい尼僧・寛如と出会う。彼女は、以前神戸に住んでいた谷福文の姪だと名乗る。谷福文は大資産家で、天文暦算に通じた学者でもあり、華僑社会では有名人で、「私」も、中国暦法のことを知りたく、一度、谷福文の家を訪れたことがあった。そんなきっかけで、「私」は大通りに面した茶房の席で、寛如の長い話を聞くことに。寛如は、話の冒頭、「私」に「范師厚という人をご存知ですか」と問うた。范師厚は、神戸在住の中国人で、何者かに惨殺された人物であった	
蜃気楼の日々 『オール讀物』 同57年2月号	この作品には「私」は登場しない。●吉岡保雄：主人公、狂言回し。中堅商社、松尾商事の資材課長、37歳。ベトナム戦争中、5年のサイゴン駐在歴がある。山口登：弁護士、もうすぐ40歳、独身。吉岡の釣仲間。黄敬南：サイゴンの華僑の富豪。妻の病死の十日後、逮捕され、やがて銃殺、財産没収。黄静：敬南の娘。父の逮捕に続き、憲兵司令部に拘留。拘留中に自殺との情報が。それから6年、突然、吉岡宅に黄静から電話がかかる。こんな時こそ頼りになると思い、弁護士の山口に黄静援助を頼むが、二人の関係は思わぬ方向に…	
その人にあらず 『オール讀物』 同58年10月号	「私」は陳さんの分身で狂言回し。1970年、大阪万博の年、かぞえ80歳になった鹿淑宝は、長男に車椅子を押させ、来日した。そんな彼女にとって、神戸の南京町は特別な土地であった。時間は、57年前、1913年に遡る。その出来事はこの年におこり、彼女は、その年のうちに結婚して、上海へ去った。その出来事とは…。中国で第二革命が失敗した1913年、革命家の日本への亡命ラッシュがあった。そんな亡命革命家の一人、李烈鈞暗殺計画にまつわる話で、その舞台が南京町であった 昭和初期の南京町→	 oldphotos.blog.fc2.com
覆面のひと 『オール讀物』 同60年11月号	「私」：狂言回し。【起】ストーリーは、趙永明が福建省泉州市のホテルで、過去に、東京とサンフランシスコで会ったことがある美貌の女性に出会うところから始まる。【承】趙永明は若い頃、勤めていた会社が倒産したり、不遇であった。そのころ、保険の仕事をしていて、一時、ロンドンに滞在していたことがあった。黄常安は、ロンドンのチャイナタウンで小さな料理店を開いていて、趙永明は滞在中、毎日のように食べに行っていた。趙永明が大阪に帰り、半年ほどして、黄常安が来日した。小料理店主と思っていたら黄は大金持ちで、趙の念願を知っていて、資金を出すからと独立をすすめる。黄の好意を受け入れて始めた事業は順調であった。だが、黄の健康状態が悪化、永明はそのことで奔走する。【転】ここでストーリーは、戦時中、日本軍が占領していた時期のシンガポールに転じ、抗日ゲリラや、日本側の「走狗（覆面のひと）」となった現地人が描かれる。さて、【結】は？	

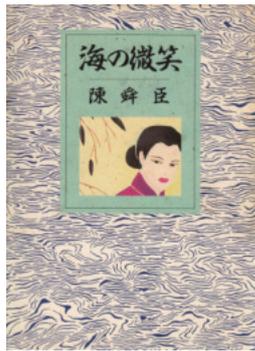
『海の微笑』 「あとがき」 及び 各編紹介(1)

徳間書店版

『海の微笑』 「あとがき」
傍線は編集委員の加筆

本書に収めた作品は、「涙無用」を除くと、私有家業の貿易と作家稼業との二足の草鞋をはいていたか、あるいはその草鞋の一方を脱いでそれほど年月が経過していない時期に書かれたものである。そのころ、私は神戸を舞台に、貿易にかかわりのあるテーマの小説をよく書いた。熟知した世界のことなので、とくに取材を要しないという、横着な考えもあってのことだった。だが、その後、国際貿易の様相は劇的に変化した。いま貿易をテーマにした小説を書こうとすれば、ふつうの作家とおなじ程度の取材をしなければならぬだろう。

舞台裏をさらけ出してしまえば、「海の微笑」は、ある作品集に収めようとしたが、分量が多すぎてあとまわしにすることになったのに、そのままになってしまった。いわばいわくつき作品である。「悪夢の果



徳間書店版表紙

て」は、「別冊宝石」創刊号用の、いわばお祝儀原稿として書いた。「銀の弾丸」は、平凡社の月刊誌『太陽』に載せたものである。「太陽」は、毎号、特集を組んでいるが、この号は「銀」の特集であった。銀にまつわる小説という注文中で書いたのだから、これは課題小説といふべきであろうか。以上の三作は、いずれもフィクション性の濃いものだが、「涙無用」だけは、そのままではないにせよ、かなり近い事実にもとづいて書いた作品である。

一九九一年三月 陳舜臣

題 初出 『海の微笑』 各編紹介(1)

<p>海の微笑 『推理ストーリー』 昭和41年2月号</p>	<p>文庫本で114頁の中編推理小説。●系井要助：神戸の青谷の宏壮な邸に住む。骨董趣味、60歳前後。二年に一度、本人は「温泉めぐり」というが、数ヶ月、邸を不在にする。秋田久三：系井邸に出入りする系井の家来のような男。「私」：狂言回し、陶磁の美に見せられた男。系井老人の骨董趣味はメッキと見破っている。系井の不在は、今回は二年も続いている。梨田弘治：社用で、セレベス島のマカッサルへ出張することに。目的は、高級貝ボタンの原料になるタカセ貝の集荷状況調査で、父親を訪問するという幼な馴染の関統南と同道することに。関統南：神戸に住んでいたが、太平洋戦争直前、ジャワのジャカルタに移住。妻が美容院を経営、彼自身はブローカーのようなことをしている。関統南の神戸時代、梨田とは同い年でウマが合った。彼には、当時、「椅子の張り替え」をしていた父がいた。梨田もこの父のことは覚えている。関統南の父親は、戦後、セレベスへ商売に出かけ、現地に女をつくり戻ってこなかったのだ。舞台の大半は、マカッサルの小島ピリン島。ここには、関統南の父・定伸と、現地の女・ロイハン、二人のあいだにできた娘・アピンが住んでいた。これらの人々はこのピリン島での出来事でどんな役割を演じ、系井要助、そして秋田久三がどう絡んでくるのか…</p>
--	---



「海の微笑」関連地図
関の一家は、太平洋戦争直前、神戸からジャワ島のジャカルタへ移住した。関統南はセレベス島のマカッサル近くの小さな島に住む父を訪ねるといふ。セレベス島近くのモルッカス群島は香料の王、丁子を産する。ヨーロッパ、中国の商船隊は、丁子を手に入れるために、いろんな財宝を積んでやって来た。

「海の微笑」関連地図

『海の微笑』 各編紹介(2) 及び 補足を一つ

題 初出	『海の微笑』 各編紹介(2)
悪夢の果て 『別冊宝石』 同41年創刊号	作中時間は1965年。その事件があったのは20年前の1945年8月14日。上海静安寺路の宝石商瑞光の主人顧敬全が自邸で射殺された。●庭村育太郎：保険会社勤務。高標年：源益貿易会社社長。陸居成：源益貿易会社社員。大石克子：元源益貿易会社勤務。かつて、庭村と付き合うも、今は高標年夫人。顧姉妹：姉・貞華、美容師、27歳。妹・淑華、デザイナーの勉強中、24歳。二年前、シンガポールから来日、庭村と同じアパートに住む。姉妹は、庭村に20年前の「上海晩報」の記事を見せ、殺された顧敬全は私たちの父で、当時、疑わしい人物として、高標年と陸居成の名があがったが決め手がなく未解決になっているという。そして、源益貿易会社に入出入りする庭村に二人の過去を探してほしいというのだが…
銀の弾丸 『太陽』 同45年8月号	作中時間は1906年からの数年。●杉並宏：工学部を出て、某造船会社勤務。社命で3年間、イギリスに赴任することに。大原和子：貿易商大原氏の娘。杉原の婚約者、19歳。宇野源一：大原商会の番頭。香港支店設置先発隊として香港に滞在。30歳前。 【銀本位制の清国】ここで、清国の複雑な貨幣制度がひとしきり記述される。ストーリーに戻り、イギリスからの帰途、香港に立ち寄った杉並にある出来事が。両替屋でポンド紙幣を銀貨に換えたあと、植物園の散歩道で、中英混血児らしい25、6歳の美女に声をかけられる。女に誘われ、大きな相思樹の木陰で語っていると…、いつか意識が消え、巡査に揺り起こされたときには、二時間経っており、財布が消えていた。 現在の香港植物園入口付近→  sekaitravelist.com より
涙無用 『オール讀物』 同56年2月号	「私」：狂言回し。「私」はこのあいだSから、李元南が10年ほど前にアメリカでひっそりと死んだ、それも、死んだあと二週間もたって発見されたという話を聞いた。Sは話のあと、「ま、そんな死に方しかできないだろう。あの男は」とつけ加えた。李元南の出身は上海だった。父親は日本軍に物資を供給する仕事をしていて羽振りがよく、家も裕福だった。李元南は23歳で終戦を迎えた。父親は日本軍に協力した過去を追及されるのを恐れて姿を消し、病気がちだった母親も、やがて杭州の実家で死ぬ。そんな時、隣家の娘に「なによ、あんたなんか！」といきなり平手打ちをくわされる。同じミッション・スクールに通って、幼馴染のつもりだったのに。その時は意味がわからなかった。仕事などない猛烈なインフレの上海で、一人になった李元南が就いたのは、大学に潜り込み学生運動のリーダーを密告する仕事だった。最初に受けた指令は、張士捷に近づくことだった。張士捷は、成人してからの面識はないが、かつての隣人で、平手打ちをくわした女性の兄だった。さて…

「銀の弾丸」、題名及びテーマ

陳舜臣さんは『海の微笑』「あとがき」で、

「銀の弾丸」は、平凡社の月刊誌『太陽』に載せたものである。「太陽」は、毎号、特集を組んでいるが、この号は「銀」の特集であった。銀にまつわる小説という注文で書いた。

とおっしゃっています。つまり、「銀の弾丸」は、銀本位制度を採っていた清朝のお金、貨幣をテーマにしようということが先にあって出来た作品ということになります。そして、題名は、作中の次の文からわかります。

「清朝末期は、中国で革命勢力と保守陣営が死闘した時代である。両陣営は力の限りを尽くして争ったが、その最も有力な武器の一つが、財力であったことはいうまでもない。惜しみなく軍資金がばらまかれた。銀の弾丸、これが盲滅法に撃たれた」

このような設定を生かすため、一九〇六年からの数年という時代背景になったのでしよう。

■画像は作中に記述がある「足銀」(純度九十九%以上の銀)

